



岩橋邦枝

中空なかぞらに

中空なかぞらに

岩橋邦枝



講談社

なかぞら

中空に

一九八七年六月十六日 第一刷発行

著者——岩橋邦枝

© Kunie Iwahashi 1987, Printed in Japan

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—九五—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-203414-X(0) (文1)

目次

中空に	引潮	郭公	揺れる木	冬の光	きりぎりす
181	141	105	73	33	5

中なか空ぞらに

装幀 中島かほる
装画 生井 巖

きりぎりす

食事時の夫と私の話し声を、娘から録音テープで聴かされたことがある。

夕食を一人で先に済ませた娘が、テレビの音楽番組を収録するつもりでダイニングキッチンに持ち込んだカセットレコーダーに、夫婦の交わすやりとりも意外にはっきりした音量で入っていた。やりとりといっても、テープを再生して聴いてみると、言葉を発しているのは主に私のほうで、煮物の味加減や昼間買い忘れた品のこと、食卓ごしに夫のセーターの袖口が一部分はつれかかって見えるというようなことまでいちいち声に出して喋っている。ふだんから夫の前で自覚しているとおりの不活発な愛想の無い喋り方だったが、その口数の多さに、自分でもおどろいた。夫の洩らす生ま返事やみじかい呟きは、ロック調の演奏の音に混りこんでいて聴きとりにくい。彼が、いつもどおり御飯代りのようにウィスキーの水割りを飲み続けながら、夕刊から顔をおこ

すときも私のほうを見返さないまま壁際のテレビへ億劫げに視線を放つ横向きの表情が、テープの再生音といっしょに再現されてとどいてくるようだった。もういいから止めて、このテープは消しておいてね悠子、と私は苦笑して言った。もちろん消すわよ、こんな雑音入りじゃどうにもならないもん。娘も、眉を顰めて笑っていた。彼女がまだ高校生の頃だった。

夫と私の間で談笑や議論めいた応酬が弾んだり、ゆっくり時間をとって話し合ったりする習慣は、いつとはなしに失われていた。声高な諍いもお互いに避けるようになった。時たま私のほうで感情を露わにぶつけて言いつのっても、夫はとりあおうとしなかった。二十三年間で終った結婚生活の最後の数年は、まともに目と目をそそいで睨み合う場面は滅多に生じなかった。お互いの年齢を考えると私は夫への甘えもすなおに示さなくなり、むしろわざとらしい気がして抑えるうちに、そっけない態度が身についた。味けない、しかし平穏な暮し……。長年つれ添った夫婦の常態とはこうしたものだろうと見做して、私はべつだん不足も感じないで、夫の要求にも鈍感になっていった。周囲に離婚や別居の話がもち上ると、面倒臭いことをよくやるなあ、と夫は首をひねって呟き、私も相槌を打った。そうした馴れ合いが私の横着さを助長させていたのも、たしかだった。

夫は、娘の悠子が女子大を中途退学して留学先のカリフォルニアへ発ってから半年後の秋、脳内出血で急死した。日曜日の夕食時に、彼ははげしい頭痛を私にとつぜん訴えてそれきり意識を

失った。そして、救急車で運ばれた先の病院で昏睡状態のまま人工呼吸器をとりつけられ、翌日の夕方亡くなった。医者が、私と義兄夫婦を立会わせて最後の手当ての心臓マッサージを行ない、その動作をやめて夫の臨終を告げる直前、それまで約二十時間にわたって異常な高熱で蒸れたように赤らんでいた夫の額の皮膚から、血の色が俄かに退いていった。

親子三人の暮しから娘がぬけていったあとも、私たち夫婦の間にとりたてて変化も生まれない日常が続いていた。娘を外国へ送り出した当座しばらくは彼女を話題にする会話が増えた。だがそれも、私の不賛成をとりあわずに子供の留学志望を叶えてやっておきながらしきりに淋しがる夫へ向けて、そら見たことかという口ぶりを私が度重ね、もしかすると夫との関係を深く結び直したかもしれないきっかけを自分からそこねた。あの子に万一のことがあっても知らないから、と私は捨てぜりふのように夫の前で何度も言った。親の自分たち二人の身には、どちらにも万一のことなど起るわけがないかのような言種を、おかしいとも気づかずには私は繰返していたのだ。

夫は、勤めの休日を除いて、夕食を家とする日は以前から稀れだった。仕事のためばかりでなく深夜の帰宅が半ば習慣化していた。泥酔状態で、編集部と同僚に送りとどけてもらうこともあった。夫婦二人だけの暮しになったからといって、彼のおそい帰りやたびたびの深酒が改まる筈もないと私は諦めてかかって、家の外の夫に相変らず心をつかわずにやりすごしていた。夫が異

常なく外から帰ってくるものときめこんで、ありふれた交通事故の心配さえ抱かなかった。まして、家の中で、私の目の前で夫に異変が襲いかかる場合を想定してみようとしなかった。それが起こる寸前まで、変哲もない日曜日の夕食時のはじまりに無感動に自分を置いていた。

十月末の日曜日だった。夕方六時過ぎに、夫はウィスキーの水割りを自分でつくって食卓につき、老眼鏡をかけ直して書物の続きを読みながら飲みはじめた。その傍で、食事支度にかかっている間、そして炊事を了えて流し台を背にした食卓椅子についてからも私は、いつかの録音テープの話し声と同じように、夫へ向けて習性で殆ど無意識に口数を重ねていたのにちがいはなかった。冷めないうちに食べて下さいよ。いけない、茶碗蒸しにギンナンを入れるの忘れちゃった……。ふと年末のボーナスのことを問いかけ、夫がうんざりしたように額を掌で擦ってみせた仕草も、うる憶えにのこっている。

私は、食卓にひろげた書物から顔をなかなかあげようとしないうちはかまわず、自分勝手に喋っていた。夫の生の終りがすぐそこにせまり彼との日常が数分後に断ち切られるとも知らないで、小うるさい無駄な言葉を口から出して目の前の夫へ向けていた。

店を出て狭い階段を下り、道端に寄せておいた自転車の鍵をはずそうしていると、女が歩み寄ってきた。さきほど私が隅の席で食後の紅茶を飲んでいるとき、勘定を済ませて硝子扉から出

ていった中年の女客だった。

私は、階段を下りて防犯燈の点った旧街道の路上へ出ながら、左ての一軒おいた隣りの金物店の鎧戸の前で通行人の途絶えた通りのほうを向いて佇んでいるその女のスーツ姿を認めたが、だれかを待っているのだろう、と気に留めなかった。「今晚は」という挨拶をうけるまで、近づいてくるハイヒールの靴音にも無頓着だった。だが通り過ぎると思った女は、自転車の後輪から一メートルほど離れた位置に立ちどまり、声をかけてきた。

彼女は、訝しげに私がサドルの脇のところから振返ったのを見ると、愛想笑いをつくった白粉顔をあさく傾かせて無言の挨拶をもう一度よこした。それから、すぐに表情を改めて「あの、失礼ですが……」と口ごもった。

私は次の言葉を待つふうを示しながら、大急ぎで心当たりを探してみた。どこかで会っていて、見忘れた顔かもしれない。四十前後の年恰好の、目の細い、扁平な印象をうける丸顔の女だった。厚めの上脛に紅をほどこした流行の化粧法が目だつほかは地味なおとなしい感じで、中背の体をつつんだ薄茶の無地のスーツも、秋らしいお洒落というより簡素な制服のように見えた。黒いショルダーバッグを提げていた。

「すみません、ちょっとお願いしたいんですけど。とつぜんで失礼ですが」と、女が真顔をくずさずに言った。遠慮がちなひくい声だが、急きこむ口調だった。

「私に？ 何でしょうか、ゆきずりの相手だと判って、私は氣がるに問返した。

「あの……電話をかけてもらえないでしょうか。番号は、わたしが廻しますから」

「電話を？」

十数メートル先の、駅前商店街へ通じる曲り角の電柱のかげに、プラスチックの覆いで囲ったダイヤル式の青色の電話機がある。そちらを指してみせる女の右の手に、黒っぽい財布が握られていた。私は、間近な相手の表情を見るのを避けて、電柱の上の蛍光灯が仄暗く照らしている公衆電話を眺めやった。「すみません」と繰返す声が入ってきた。

「たぶん先方は奥さんが出ると思いますが、ご主人と替わるように頼んでもらえませんか。ご主人に仕事の連絡で……それとも利殖のお勧め、それだとこちらの名前を言わないで済むかしらね。いえ、彼がもう帰っているかどうか、それだけ聞いてもらうだけでもいいんです。お願いできますか」

私は無言で、女の顔へ目をかえした。自分では何の感情もさしつけるつもりはなかったが、女の細い目にびくっとしたこわばりが表れた。そして彼女は、紅を塗って化粧した上瞼を伏せ、黙りこんでしまった。私は自転車のハンドルへ両手をかけた。店の前の路上をトラックが響きをたてて、二台続いて通り過ぎるのを待ってから

「申しわけありません、急ぎますので」

そう言つて、頭をさげた。

ハイヒールの足もとに目を落としてつつ立っている女をそこにのこし、私は青い電話機が据えてある角まで自転車を押して歩いていった。家へ帰るには少し遠廻りになるが、女の視野の中から早く逃がりたい気持ちに促されて曲り角を折れ、商店街の途中で裏道へ入る道順をとった。新宿始発の下りの急行電車がちょうど到着したところらしく、私鉄駅のほうから店頭の明りのさす通りへ入ってくる人びとの急ぎ足の姿が前方に見えた。さっきの女も勤め帰りかしら、と私は思った。年齢に不釣り合いと見られるにちがいないジーン姿でサンダルをつっかけ、夜八時を過ぎた時間に一人で外食している私は、あの女の目に何者とうつつたのか。彼女からうけた妙な頼み事と考えあわせて苦笑が湧いた。

しかし笑うだけで済まされない、粘り跡が付着したような後味悪さが、家に戻ったあとも消えなかった。

一人暮らしになってから翌年の春頃まで、私は普段着の身なりでさしつかえない範囲でよく外へ出ていって食事した。旧街道沿いの和菓子屋の二階のスナックにも、三日か四日に一度のわりあいでかよった。その店まで、私の住まいから自転車で片道十分足らずの距離だ。小さな暖簾を垂らして赤飯やいなり寿司も置いている和菓子屋の横で、二階の店の硝子扉へ通じる階段の昇降口が短冊型に張り出していた。

私たち一家が結婚十三年目に都内のアパートから引越してきた頃は、駅前が目だつ建物といえ
ば銀行だけだったが、その後新しい団地が建ち丘陵地帯の宅地造成がすすんで私鉄駅の界隈も急
速にひらけた。さらに都内の大学の学部や短大が移転してきて以来、駅周辺には小綺麗な店が増
えた。和菓子屋の上に色ちがいの箱を重ねたように煉瓦色の外壁を見せているスナックは、ここ
も若い客を当てこんで新規に開いたものらしかった。だが商店街を抜けた先の、鄙びた店がまば
らに並んだ旧街道までは学生たちの足は惹かれなとみえて、店内が静かदैいつ入っても空いて
いるのが、私には何よりだった。階下の和菓子屋で店番に坐っているほうが似合う感じの初老の
女が、中年の男をマスターと呼んでいた。その店に頻繁にかよっていた時期も、彼ら二人は私を
見て笑顔で挨拶するだけで、馴染んで話しかけてくるようなことはなかった。それも、当時の私
を吻とさせていた。人恋しいくせに人と会って口をきくのが煩わしかった。二週間おきに、友人
に紹介された精神科医に処方してもらう薬を取りに都内の病院まで出かける日も、寄り道する気
持が湧かなかった。夫の急死が架空じみて感じられ、しかし間違ひなく彼の死は私の毎日の暮し
を侵していた。

夫がたおれる直前まで体を置いていた椅子と食卓は、他の三脚の椅子といっしょに壁際へ寄
せ、代りに小さな卓袱台を床の中央に据えた。私は辛抱してそこに一人で坐り、ダイニングキッ
チンで食事する習慣をおし通すよう努めた。しかしその場所のあたりには、夫との生活の最後の